第８１の山登頂記

１２月４日（日）、地元山の会の行事で、九州・くじゅう連山のうちの**三俣山（本峰・標高１７４８Ｍ）**に登ってきました。大分・別府から熊本へ抜けるやまなみハイウェイの途中、長者原付近から見るその山容は、いかにも威風堂々としています。どこから見ても三峰の山に見えることよりこの名が付けられているようですが、実際は四つの峰からなっている。今回はそのうちの西峰と本峰（主峰）に登頂しました。

登山当日、メンバー７人（男３＋女４）は、リーダーが早朝４時半過ぎから順に参加者をに拾ってくれて、中国道～九州道～大分道を経由し、その間、途中の幾つかのＳＡで朝食を採ったり、弁当を買い込んだり、また走行の途中では深い霧に包まれたり、更には大分道に入り東へ向かっていた車窓からは、金色に輝く日の出を拝んだりして、結局、９時前に長者原の少し西寄り、ヘアピンカーブの大曲駐車場（道脇のスペースを利用した車１０台位が置ける、半ば登山者専用の駐車場）に到着。ここからも、頂上付近が雪化粧している三俣山が見えました。

我らが登山準備をしていると、ほぼ同時期に運転手つきレンターカーで到着した１０人位の佐賀の登山団体は、すぐに準備運動。そのうち早々に登山口に向かって行きました。ここで、高度計をチェックしてみたら約１２５０Ｍ、頂上まで標高差約５００Ｍ。若い頃なら１時間で登った高さ。我々も９時１５分過ぎには登山口へ。使用前の揃いの記念写真撮影を終え、登山開始。

前日まで２日間雨が続いていて、そのせいでクマザサの間を縫うように続く登山道は、足元が一部ぬかるんでいた。当初は、黒い火山灰土の汚れを気にしていたが、スパッツを付けているので、「それ以上は関係ない」と開き直り、それほど気にせず歩く。いきなりの急登で、久しぶりのせいもあり、気が引き締まる。

３０分も歩くと、硫黄山の硫黄回収作業用に開いたと言う鉱山（コンクリート）道に踏み入る。道も広く歩行の障害も無く歩き易く、正面に三俣山の全容を見ながら、だらだら道を登って行く（※）。右手奥の方に白い煙がモクモクと立ち上る硫黄山を臨みながら登って行くと（※）、道脇にがっちりした鉄製の柵というか、塀と言うか、立ち並ぶ。良く良く見ると、塀の中は、大小の岩石の山。塀は土石流対策枠と解る。塀を過ぎると、もろに岩石が立ち並んでおり、僅かなショックを与えただけで今にも転げ落ちそうな岩が幾つもある。「この辺で休憩不可。止まらず進め。」の標識あり、休まず進む。三俣山の山裾は随分近くになった。

そのうち、鉱山道を逸れ、岩だらけの登山道へ入る。岩の上に、登山者を導く黄色いペンキで書いた丸印が、「これでもか、これでもか」と言う位、沢山書いてあった。この付近まで来ると、足元には霜柱が・・・・。そうするうちに、あっちにもこっちにも樹氷が・・・・。美しい（※）。カメラの無い人もケータイカメラを駆使し、撮影会の様相を呈し、いよいよ登山時間は延長、延長。われらの登山は、急ぐ旅では無い、楽しむ旅です。

登山開始後約１時間半（標高は１５００Ｍで、やっと予定の標高差の半分消化）経過。谷あいで、右手に石室のある「すがもり越え」に到着。当初は、ここに売店もある木製の小屋があったが、壊れて石室に変更されたという話。小屋の営業はしばらく続いていたが、今ではそれも無くなり、避難用石室と一画の釣鐘だけが残る。誰かが鐘を撞いた。石室を背に左手に振り返ると三俣山の急勾配が見上げられる。谷あいの進行方向まっすぐ方向奥には、以前つつじの時期に登った平治岳が。ここも頂上付近に白い帽子をかぶっていた（※）。以前登った山が姿を変えて見え、感慨深い。近くにあった温度計を見ると２℃位。

一服後、再び、三俣山に取り付く。振り返って硫黄山の煙を鑑賞したり、平治岳の様子を見たりしながら、岩だらけの登山道を登って行く。木の枝に着いた樹氷の氷が、先ほどより幅広くなったようだ。１２時頃やっと、三俣山西峰頂上（標高１６７８Ｍ）に到着。

日差しはあるが、風が冷たいので、じっとしていたら寒いくらい。風を避ける側のクマザサの中に陣取り、めいめいが持てる防寒着を着こんで昼食。この寒さの中、でもやっぱり乾杯はビール。女性陣からも、思わず“美味しい”との声。私は、自家製弁当を持参したが、殆どの人が、ＳＡのコンビニで買った弁当を開いてぱくつく。私からは、山口特産、県北部・徳佐のリンゴをデザートにプレゼント。奈良漬も廻って来た。

昼食後しばらくして、本日第２の峰、本峰方向へ進む。少し登り進み、３０分程だったでしょうか、頂上到着。登頂記念のバンザイポーズの集合写真撮影（※）。西峰同様、ここも３６０度眺望ＯＫ。気温は０℃か１℃かくらい。

下山は、もと来た道を折り返す。足元がぬかるんで滑って困ると予想していたが、日差しを受けた地面は、案外乾いていて助かった。下山時間は、登りより速く、すがもり越えまで５０分位、駐車場には２時間半位で（１６時前には）到着。三俣山を振り返ると、日差しがあった側なので、頂上までの白い帽子はすっかり消えていた。
当日の歩行数はなんと１６３３１歩。思わず頑張っていた。

この日は、駐車場から３０分ほどの距離にある湯坪温泉の民宿に泊る。露天風呂で一風呂浴びた後、事情により登山しなかった別行動の４人とも合流し、忘年懇親会開催。ビールもふんだんに注文したが、持参の焼酎５合瓶２本も無くなった。

翌日は、帰るだけでも良いが、折角と言うことで、大分・豊後大野市にある紅葉で有名な用作（ゆうじゃくと読む）公園に観光。生憎、盛りを殆ど過ぎて、後期高齢紅葉となっていた。旧岡藩・家老の別荘地跡とかで、心字池の周りの紅葉など、ピーク時は見ごたえのありそうな公園であった。

以前から良く目にしていた威風堂々の三俣山、更に、今回は全くの青空のもと樹氷まで見ることが出来、感動の登山を楽しむことが出来た。　　山口／古賀

参考）インターネット；フリー百科事典「ウィキペディア」より抜粋。

霧氷：氷点下の環境で、空気中の過冷却水滴もしくは水蒸気が、樹木その他の地物に衝突して凍結もしくは昇華することで出来る。白色や透明の氷層の総称。いわば自然現象としての着氷現象。普通、樹氷・粗氷・樹氷の３つに分類される。

樹氷；冬山などで、過冷却水滴からなる濃霧が樹木などの地物に衝突し、その衝撃で凍結・付着した氷層。一般的に氷層を付着させた樹木そのものを指して樹氷と呼ぶこともある。気温―５℃以下で
生じる。